

夏、ある朝のにおい

阿曾 哲子 福島県郡山市 五十五歳

ふわふわの白いコットンボールの種から育てたワタの木も、すくすくと伸び、新しい葉が次々と顔を出す。

私の背丈ほどになったひまわりは、未来へとつなぎいくいのちの種を、母の子宮のようにぎゅっとその中に抱きかかえ、大切に育んでいる。

朝目覚めたら、まず冷たい水を飲み、庭へと出た。雨上がりは、あつという間に景色が変わる。木々の枝に寄り添っている葉も、昨日より色味を増し、ひとまわり大きく見える。

熟しているミニトマトを、ひとつふたつ、さつと洗って口にふくむ。これは家族にいき渡らない私自身へのご褒美。しみじみと、さして広くもない庭を眺め、ワタの木と早咲きコスモス、そして朝顔とひまわりの周りの土に手を触れてみた。

「大丈夫？君たち喉は乾いていない？」

返事の声が聞こえるわけではないが、触れた土から、手にしっかりと感触が返ってくる。

深く深く呼吸をして、空気のおいを確かめる。今朝の水やりはしないでおう。そう思えるような湿った風は、ここに咲く紫陽花が呼びよせているのかもしれない。

大きく背伸びをすれば、柿の木の葉にも手が届く。このからだに光が差し込めば、私も光合成ができるはず。

さつき食べたミニトマトは少し酸っぱいし青くさい。けれど口いっぱいに広がったそのにおいは、とてもここになじんでいる。

「おはよう」って。

その声は、きつと風であって、私でもあって。